

## 『相澤一浩さん:意外と知らないハチ公の真実』



秋田魁新報社政治経済部で記者をされている相澤一浩さんからは『意外と知らないハチ公の真実』というタイトルでのお話がありました。

「今日させていただく話を通じて、ハチ公、および秋田犬に興味を持っていただき、さらには秋田県にも関心を持っていただける機会にできればと思っています。近年秋田県はなにかと暗い話題が多く、たとえば高齢化率が全国一位、人口減少率も全国一位、くわえて自殺率も全国一位というような現状です。報道を通じて秋田に何らかの活力を与えられたらと思っていますところ。今回はハチ公のふるさとである秋田県の地元紙、秋田魁新報社の報道や記事を通じて、これまでとは少し違ったハチ公を紹介できればと思います。」

相澤さんの勤務先である秋田魁新報社の創業は明治7年、今年で144年目を迎えます。秋田県の地元新聞としての歴史は古く、過去にはのちに首相となる犬養毅氏が主筆を務めていたこともあるそうです。

「秋田市に本社を構え、支社は東京・大阪・仙台に、県内にはハチ公の生まれ故郷である大館市、花火で有名な大仙市などに9の支局があります。」

昨年の春まで相澤さんは内幸町にある東京支社に勤務されていましたが、その後秋田の本社に戻り現在に至っています。

### 秋田犬の現状

最初に秋田犬の現状について、簡単な紹介がありました。

「現在、世界的に秋田犬がブームとなっています。その大きな理由のひとつに、東日本大震災の後、大震災への復興支援に対するお礼として秋田県からロシアのプーチン大統領に秋田犬が贈られたことが考えられます。それをきっかけに、ロシア国内での秋田犬の人気は急激に高まっている状況です。」

さらには、先日開催された平昌オリンピックでも秋田犬が話題になりました。

「フィギュアスケートで優勝したザギトワ選手の会見です。新潟県で直前合宿を行っているとき、ザギトワ選手は秋田犬

の写真が載っている雑誌を見て秋田犬をかなり気に入り、“オリンピックでいい成績がでたら秋田犬が欲しい”とお母さんにおねだりをしたそうです。実際に金メダルをとり、それが実現する運びとなっています。」

現在、秋田県にある秋田犬保存会が、ザギトワ選手へ贈るメスの秋田犬を準備しているという状況にあるそうです。

## 銅像の完成を目の当たりにして

ハチ公の 80 回目の命日、2015 年 3 月 8 日に東大農学部のキャンパスにて、ハチ公と上野博士の像の除幕式が行われました。

「上野博士は東大農学部の教授だったことから、現在の東京大学農学部の先生方が中心となり“ハチ公と上野博士の像を東大に作る会”を立ち上げて寄附金をつのり、銅像を完成させるに至りました。渋谷駅で上野博士の帰りを待っていたハチ公が、博士との再会を喜んでじゃれつく場面を表現したものです。」

銅像の作製者は名古屋市在住の彫刻家、植田努さん。銅像の大きさは、高さ 1.9 メートル、幅 2 メートルで、ハチ公の大きさは実物より多少大きく作られているそうです。

「除幕式へは取材に行き、新聞記事として掲載いたしました。秋田県の地元の人間としてとても嬉しかったのを覚えています。また、ハチ公の没後、80 年も経っていながら大勢の方がその場に集まっていたことに、ハチ公、そして秋田犬の人気の高さを感じさせられました。」

## ハチ公の軌跡

「ハチ公の犬種である秋田犬ですが、古くは狩猟用のまたぎ犬だったと言われています。外見の特徴は立ち耳と巻き尾で、メス犬でも成犬になると体重は 25 キロ、体高が 60 センチほどになる大型犬です。茶色の毛色のことを“赤”、白毛を“白”、ゴマ色を“虎”と呼ぶのが一般的です。」

大正 12 年 11 月、秋田県大館市にある農家の斎藤家にてハチ公は誕生しました。

「上野博士は東大の農学部で農地の耕作整備などの教育や研究をされていたため、農業土木関係に携わる教え子たちを全国各地に送り出していました。当時秋田県庁に勤めていた教え子の一人が、上野博士が純血の日本犬を欲しがっていることを聞いていた折に、斎藤家に秋田犬が誕生します。そこでその教え子の方が上野博士のために 1 頭譲ってもらったというのが、上野博士とハチ公の出会いのきっかけになります。」

後にハチ公と名付けられる秋田犬の子犬は生後 50 日ほどで上野博士のもとへと送り届けられ、上野博士と暮らし始めることとなります。

「ハチ公という名前は、上野博士の奥様にあたる八重子夫人がつけたという話があります。真実のほどは分かりませんが、ハチがお座りをしたときの前脚の様子が漢字の八に見えたからとか、上野家で飼う八番目の犬だったからといった説が語られています。」

上野家には博士と夫人のほか、養女やお手伝いさん、書生さん、ほかにも犬 2 頭が暮らしており、とても賑やかな家庭だ

ったそうです。

「上野博士はハチと一緒に風呂に入っていたこともあったそうです。今では犬をお風呂に入れるのは一般的になっていますが、その当時はとても珍しいことでした。また、博士が学生を自宅に招いて花見をすることがあったそうなのですが、そのような場にはハチだけが連れてこられるなど、博士はハチを特別に可愛がっていたことが分かるエピソードが語られています。」

上野家ですくすく育っていったハチは、上野博士の通勤についていくようになります。

「上野博士は渋谷区松濤の自宅から大学のあった目黒区駒場まで、ハチと、ほかの2頭と一緒に歩いて通勤していたそうです。また、西ヶ原の農事試験場（現在の北区）や、出張に行くときには渋谷駅を使っていたため、博士について行く中でハチは渋谷駅までの道のりを覚えたのではないかとされています。」

ハチと暮らし始めて1年半ほど過ぎたころ、上野博士は教授会中に脳溢血で倒れ、そのまま帰らぬ人となります。

「博士が亡くなった後、ハチは、八重子夫人の親戚方の日本橋の呉服店や浅草の理髪店に預けられることになりました。しかしいずれの家も上野家のような大きな庭がなく、リードでつながれたままというような窮屈な暮らしを強いられていたそうです。そんな中でハチはお店を荒らしたり、子どもたちにいじめられたりなど、なかなか新しい生活に馴染むことができませんでした。その後、八重子夫人が移り住んだ世田谷に行くことになるのですが、そこでも田畑を荒らしたりするなど、やはり環境に馴染めず、最終的にハチは上野家で庭師をしていた小林さん宅へ迎えられ、ようやくそこで落ち着いて生活を送れるようになりました。」

小林家に腰を据えることのできたハチは、渋谷駅通いを始めるようになります。

「渋谷駅でのハチの状況についてですが、弊社の取材記事によりますと、炭で顔に落書きをされたり、近くの焼き鳥屋さんから焼き鳥をもらったり、安産のお守りになるということで鑑札を盗まれたりなどといったことが書かれています。」

昭和7年、渋谷駅でのハチの様子が朝日新聞で紹介されてから、ハチの名前が全国に広まっていくことになりました。

「一躍有名な犬になったハチは、その数年後の昭和10年に亡くなりました。しかし、その人気は80年以上経った現在もなお続いているのです。」

## 当時のハチ公の姿により迫る

取材により明らかになった、当時のハチ公についてのエピソードについての紹介がありました。まずは、生前のハチ公を見たことのある方で、『ハチ公文献集』を著された林正春さんのお話です。

「ハチ公研究家の林さんがハチを実際に見た印象は“やつれた老犬でいつもゴロっと横になっていた。しかしその目が忘れられない。懐かしさを感じさせる優しい目だった”と語っています。ハチがなぜ渋谷駅に通ったかという理由については、“渋谷駅周辺にある焼き鳥屋さんから焼き鳥をもらうのが目的だったのではないかと人がいますが、私は主人のにおいやぬくもり、温容さを求めて渋谷駅に行っていたのではないかとお話を聞いています。”とお話されていました。」

もうひとり、日本犬保存会の創始者である齊藤弘吉さんの見解です。

「齊藤さんは“ハチの心を考えると、恩を忘れないという気持ちは少しもなかったのではないか。あつたのは、自分をかわいがってくれた主人に対しての愛情だけだったと思う”と自書に書き残されています。」

渋谷駅で主人を待ち続けたという忠犬としての美談はいまなお語り継がれていますが、なぜ待っていたかということについては、それぞれの感じ方や考え方が存在しているようです。

「そのようなところにも思いを巡らせることも、ハチが私たちに残してくれた楽しみのひとつなのではないかと思います。」

ハチの晩年の写真から、胴輪に『ハチ号』と名前が書かれていることが分かります。

「この写真は白根記念渋谷区郷土博物館文学館に保管されています。写真は昭和8年、9年あたりに撮影されたもので、そのころ渋谷駅の東側にあつた『まつもと』という料理店の前に横たわるハチの姿になります。」

写真のハチは駅の東側で写されたものですが、上野博士の自宅のある松濤は渋谷駅の西側にありました。

「博士が亡くなってからハチが渋谷駅に行くときにはもっぱら駅の西側で、東側には行くことがないのではないかとされていました。ところがハチが昭和10年に亡くなった場所は駅の東側だったため、なぜ東側だったのかという謎が残っていたのです。しかしこの写真が見つかったことで、ハチは生前にも駅の東側に行っていた事実が明らかになったという大変貴重な一枚です。」

## 1 世紀を経て、天国で再会

八重子夫人は渋谷で上野博士と一緒に暮らしていましたが、実は博士には親が決めた婚約者がいたため、二人は入籍をしていませんでした。

「今でいうところの事実婚という関係です。そのため、博士が亡くなった後は八重子夫人も渋谷を離れ、ハチは植木職人の小林さん宅で暮らすようになり、家族がバラバラになりました。晩年、八重子夫人は“自分が死んだらせめて博士の墓にある灯籠のもとに埋めて欲しい”と語っていたという文献が見つかっています。」

しかし、博士とハチのお墓は青山霊園に、八重子夫人のお墓は別の場所にあり、夫人の願いはしばらくの間かなわずにいました。

「八重子夫人の生前の想いを知った東大の塩沢昌教授がどうにかしてかなえたいということで、八重子夫人の分骨を提案されました。上野家と八重子夫人の遺族の了解を得て、2016年5月に八重子夫人の青山霊園への合祀が実現し、上野博士、八重子夫人、そしてハチがようやく一緒になることができました。」

1 世紀を経ての再会を果たしたこの話は、秋田魁新報社の新聞記事としても紹介されたそうです。

「ハチを通じてたくさんの人々が、それぞれに自分のできることをしようと努力されたことで、このように合祀が実現したり、東大に像がつけられたりしてきたのだということ、取材通じて強く感じました。何かしたいという気持ちを動かす力がハチ

の物語にはあるのだと思っています。」

## ハチ公像アレコレ

渋谷駅前のシンボル、待ち合わせ場所として有名なハチ公像は日本のみならず海外の人々にも広く知られています。

「初代ハチ公は戦時中の金属供出の流れのなかで撤去されてしまったため、現在渋谷駅前にあるハチ公像は 2 代目になります。彫刻家の安藤士さんがてがけ、終戦後の 1948 年につくられました。初代ハチ公像は安藤士さんの父親であり、彫刻家の安藤照さんによって製作されました。1934 年のことです。」

ハチ公の銅像は渋谷駅前だけでなく、国内、そして海外でも見ることができます。

「当然とも言えますが、ハチの生誕の地でもある秋田県大館市駅前にもハチ公像があります。さらには、アメリカの俳優、リチャード・ギアさん主演でハチの映画がつけられたことから、アメリカのロードアイランド州ウーンソケット市にもハチの銅像がたてられました。その場所は劇中でハチが主人の帰りを待つシーンのロケ地だったそうです。」

## 戦前から海外の人々の心をも魅了してきた秋田犬

「秋田犬が世界に知られることになった出来事がありました。昭和 12 年 4 月に来日したヘレン・ケラーさんが秋田市を訪れたときのことです。」

秋田市に来たヘレン・ケラーさんは、秋田犬と会いたいと県の関係者に要望します。

「渋谷駅に行った際、ハチ公が主人を待ち続けていたという話を聞いたヘレン・ケラーさんが強く感銘を受けられたからです。秋田市に行った際に秋田犬と対面することがかなったのですが、それだけにとどまらず、秋田犬をアメリカに連れて行きたいという話にもなりました。」

秋田訪問から 1 か月後、ヘレン・ケラーさんが横浜港からアメリカに戻るときには、カミカゼ号という名の秋田犬が同乗することになりました。

「カミカゼ号は、秋田の警察学校で剣道の師範をしていた愛犬家の小笠原さん宅で誕生した秋田犬です。」

そうしてカミカゼ号とともにアメリカに戻ったヘレン・ケラーさんから、少ししてから小笠原さんにあてて一通の手紙が届きます。

「カミカゼ号が亡くなってしまったという知らせでした。その手紙の中で彼女は、“生後 5 か月ほどだったにもかかわらず、こんなにも献身的な犬は今まで見たことがありませんでした。毛糸を着た天使がいるとしたら、実にカミカゼ号と言えるでしょう。秋田犬は本当に私の気持ちにぴったりするいろいろな性質を持っています”と書いていたそうです。」

昭和 14 年、ヘレン・ケラーさんから小笠原さんのところにもう一度秋田犬が欲しいとの連絡が届けられます。

「小笠原さんは再度秋田犬をヘレン・ケラーさんに贈りました。秋田犬が無事にアメリカに到着したニュースは現地新聞でも紹介され、かなりの話題となりました。昭和 14 年は戦争直前、すでに日米関係が悪化しているときだったため、小笠

原さんは秋田犬の無事をたいそう心配をしていたそうです。」

この出来事を通じ、秋田犬の魅力は戦前のアメリカで一気に広まることになりました。

「再びヘレン・ケラーさんから届いた手紙の中には“私はいただいた秋田犬を愛犬としてばかりでなく、今なお輝かしい記憶として残っている日本国民からの使者として愛しています”との感謝の言葉が述べられていたそうです。」

## ロシアと秋田県の犬猫外交

「冒頭にも少しお話させていただきましたが、現在、秋田県とロシアの間では犬猫外交のようなものが行われています。いわゆる政治や防衛といった一般的な形の外交ではありませんが、2012年に秋田県からロシアのプーチン大統領に秋田犬が贈られました。」

“ゆめ”名づけられた赤毛のメスの秋田犬は、現在もプーチン大統領とともに暮らしています。

「東日本大震災後、ロシアが秋田県をはじめ東北各地の復興にたずさわってくれたことに対する感謝の気持ちを表したいとの思いがきっかけです。プーチン大統領は大の犬好きで知られていますので、秋田犬を贈りたいと秋田県から外務省に打診をしたところ、現地からの了解を得ることができました。」

ゆめを贈った後、今度はロシアのプーチン大統領から秋田県知事の佐竹敬久さんにシベリア猫が贈られることになりました。

「佐竹知事も大の猫好きで知られている方です。公舎では猫 10 数匹と一緒に暮らしているほどだそうです。プーチン大統領から贈られた猫はミールと名付けられました。ロシア語で“平和”を意味する言葉です。」

猫のミールと佐竹知事の暮らしぶりは[秋田県のホームページ](#)で動画をご覧くださいことができます。

「一方、ゆめとプーチン大統領の様子はメディア向けに時折公開されていますので、ご覧になっている方も多いかと思いますが、ゆめもロシアで元気に暮らしているようです。」

ちなみに海外でも、ハチ公の物語と通ずるような秋田犬の話があちこちにあるといいます。

「秋田県にある国際教養大学の名越健郎教授に寄稿していただいた内容を紹介しますが、世界で秋田犬が普及する中、秋田犬の忠犬ぶりを示す情報が近年メディアで頻繁に報じられているという現状があるそうです。たとえば、2016年にはブラジル南部の都市で、亡くなった飼い主と9年間散歩した道を毎日歩く秋田犬の物語が全国ニュースになりました。スペインのバルセロナでは、昨年夏、飼い主の女性が入院している病院の玄関先で1週間待ち続けた秋田犬の話があり、ヨーロッパ中で話題になったようです。もうひとつ、ロシアの西シベリアでは、一昨年交通事故で亡くなった飼い主の事故現場に立ち尽くす犬が、ハチ公二世ということで話題になりました。」

しかし、ロシアの犬の話に関しては秋田犬ではなく、実は雑種犬でした。プーチン大統領の影響でロシアでは秋田犬人気が高まっていて、もれなく忠犬ハチ公の話もとても有名になっています。そのため忠犬ハチ公の物語に引っ張られたところがあり、その犬は秋田犬だと間違えて報道されてしまったケースがあったそうです。

「2016年12月には、プーチン大統領は日本メディアの会見場にゆめを連れて現れました。その時大統領は、“秋田犬は普通の犬と違う。厳格な犬。番犬のような役割を果たし、いつも守ってくれる”と話されていました。私自身も犬と暮らしているので感じていることなのですが、日本ではペットに可愛さを求めがちですが、欧米の愛犬家は忠誠心などの哲学を犬に求めていると思います。そういった犬の哲学的な側面が見られる話しなどが SNS を通じてどんどん広まっていき、秋田犬の人气が世界的に高まっているという状況であると考えています。」

また、平昌オリンピックのフィギュアスケートで金メダルを獲得したアリーナ・ザギトワ選手の話は記憶に新しいところです。秋田犬保存会からメスの秋田犬が贈られる予定になっていますが、秋田県からは、ザギトワ選手に秋田犬のぬいぐるみやタオルといったグッズをプレゼントしたそうです。

「世界的に有名な選手の発信力はすごいもので、秋田県から贈ったそのぬいぐるみはあっという間に完売し、ゴールデンウィークごろまで入荷がないそうです。ちなみにそのぬいぐるみは秋田空港と大館市にある空港でしか買うことのできないものです。」

ザギトワ選手は現在、スケートに専念するためにモスクワ市内のアパートで祖母と一緒に暮らしています。

「モスクワは世界的にみても家賃の高い場所で、東京での家賃相場よりもよりも高いそうです。選手が実際に暮らしている部屋がどんなものかは分かりませんが、家賃の高さからして決して広くはないだろうと想像されます。ですので、そのような場所に大型の秋田犬を贈って大丈夫なのか？という心配の声も上がっているとも報じられています。しかしザギトワ選手は秋田犬と絶対に暮らすんだと話しており、名前は“マサル”にすると決めたとのことです。」

日本語の勝利からとってマサル(勝)という名前にしたのは、いかにもスポーツ選手ならではの発想です。

「贈られる予定の犬はメスなので、日本人としてはその名前がいいのかな・・・と思うところはあるでしょうが、このような形でも秋田犬、そして秋田県の話は世界中に発信され続けています。」

## 秋田県と秋田犬の現状

「秋田犬の人气は海外で年々高まってきていて、AKITA と書くと、秋田県ではなく秋田犬のことを意味するほどの人気ぶりです。地元としましては、秋田犬人気を一時のブームで終わらせずに、より広く長く伝えていきたいと思っているところです。」

そのひとつ、地元の自治体が制作した、**MOFU MOFU☆DOGS “Waiting4U～モフモフさせてあげる～”**という動画が紹介されました。

「こちらの動画は秋田県の大館市が秋田犬を売り込んでいこうということで制作したものです。海外での秋田犬人気も後押しして、動画の国際コンテストの2部門でトップ賞に選ばれました。動画の中で秋田犬と一緒に映っていたのは秋田県の特産物、有名な祭りや名所などで、秋田犬とともにそのような秋田県の特徴も知っていたければという思いでつくられています。」

2017年、ハチ公の地元の秋田県大館市では、大館駅前に**秋田犬ふれあい処**という、誰でも秋田犬に触れ合える場所をオープン

ンしました。

「大館市ではさらに秋田県をより知っていただくために、秋田犬と記念撮影ができるコーナーを設けたり、大館の名産品のまげわっぱの販売をしたり、観光案内所も併設する計画をしています。」

ハチ公の駅というコンセプトで作られるこちらの施設の開館は 2019 年度を予定しているそうです。

「最後に秋田犬の現状を少しお話させていただきます。海外では秋田犬の飼育頭数が増加していますが、日本では逆に減少傾向にあります。核家族化や少子化が進み、秋田犬などの大型犬を飼う余裕が社会全体から失われてしまっているように感じています。秋田犬は力が強いですから高齢者がひとりで散歩するのは難しいですし、現役の若い世代は仕事が忙しく、朝晩たっぷり散歩をする余裕がないなど、時間的、経済的、年代的背景に影響を受けて飼育頭数が減少してきているのだと思います。最初にお話ししましたが、秋田県は高齢化率が日本で最も高く、若者の流出も日本で一番進んでいます。そのようなこともあり、秋田県でさえも秋田犬を飼う家庭は減少しています。海外での秋田犬人気は高まっていますが、秋田犬の本場での飼育頭数が減少している現状は決して喜ばしいことではありません。県内、そして国内で秋田犬を保存していくことについても、何かできることがないかと考えています。」